

日本記者クラブ会報

一九九八年三月二十三日（月）研究会

東京都千代田区内幸町二丁目一
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ
電話 ○三三二五〇三二七二二

化学物質実験室の モルモットにならないために

ダイアン・ダマノスキ

ダイオキシンのような合成化学物質が、ホルモンが担っている体内の伝達システムを混乱させ、生物の生存に関わる生殖機能にまで悪影響を与えることが最近分かってきた。摂取量よりも摂取時期がむしろ意味をもち、発育時期にある胎児や子どもに対して特に永続的なダメージを与える危険性も指摘されている。元ボストン・グローブ紙の科学記者で『奪われし未来』の著者の一人であるダマノスキさんは、複雑な問題を、最新の研究と科学的証拠に立って、冷静に解説し、その特異性と危険性を強く警告した。

過去三十年間、有毒化学物質の悪影響に対する私たちの関心は、おしなべて単純に有毒物質という枠におさまっていました。間違いなくガンは重大で恐ろしい懸念材料です。しかし、それは、新しい科学的論拠が示される

につれ、現在地球を汚染する人工化学物質が突きつける健康への脅威を物語る全体像からは、かけ離れたものとなっています。残念ながら、私たちがガンに気をとらわれているうちに、科学文献ではかなり以前から

指摘されていた重要な問題の兆候を見逃してしまいました。長期間にわたる野生生物の研究、研究室実験、さらに人体に与える影響の研究により、一般に普及している多数の合成化学物質が、あらゆる不穏な健康問題とつながることが分かりました。それは次のようなものです。

- 生殖機能障害
- 異常な性的発達や生殖器欠損
- 精子の奇形や精子数の減少
- 免疫機能の抑制
- 脳の発達障害、行動異常、学習障害

アメリカで二年前に出版された『奪われし未来』の中で、共著者のシアア・コルポーン、ピート・マイヤーズ、そして私は、化学物質による健康被害の話をもとに、奇形誕生の枠を超えて議論しました。この本は、ホルモ

目次

化学物質実験室のモルモットにならないために	1
ダイアン・ダマノスキ 科学ジャーナリスト	
長野パラリンピック バリアフリーへ第一歩	9
大日方邦子 パラリンピック代表選手	

ンを混乱させる化学物質に関して明らかかな科学的証拠をもとに、つまり科学者たちが「ホルモン作用かく乱物質」と呼ぶ問題を探究したのです。私たちジャーナリストは、一般の人々にこの複雑な問題を理解してもらおうと、関心を呼ぶような表現を追求してきました。

イギリスのジャーナリストの中には、こうした化学物質を「ジェンダー・ベンダース（性曲げ）」と呼ぶものもいます。性的に混乱する生物をつくりだすからです。またこうした合成化学汚染物質の中には、本当のホルモンであるかのように作用して身体を騙すため、「ホルモン・コピー・キャット」「ホルモン詐欺師」などと呼ぶジャーナリストもいます。私のお気に入りには「ホルモン異常（Hormone Havoc-ホルモン大破壊）」です。

野生生物減少の一因にも

それをなんと呼ぼうとも、ホルモン作用かく乱物質は、子どもにとって最も重要な問題です。半世紀以上にわたり、合成化学物質に関する実験は世界的に行われてきましたが、どのように子どもの学習能力や免疫能力、そ

れに生殖能力に影響するかの理解はまだ始まったばかりです。まず、化学物質の害を議論する際に、その方法を変えざるを得なくなっただ点からお話させてください。

科学分野におけるいろいろな新発見は、毒性化学物質に関する議論の焦点を、大人やガンをから、子どもと発育にシフトさせています。

これまで、化学物質汚染に対する懸念は、職場や事故で露出した人、または廃棄物処分場や焼却施設の近所に居住することなどにより、比較的高レベルの合成化学物質に接触する機会がある人へのみ向けられてきました。ホルモンに影響を与える化合物に関する、最初の研究で次のような指摘も出てきています。すなわち、私たちの体内にある「バックグラウンド値 (Background Levels)」の化学物質、つまり人の体脂肪に蓄積するDDT、PCB、ダイオキシンなどのごく普通の汚染レベルでさえ、すでに懸念の対象だということなのです。

これらの化学物質が人体にダメージを与えるやり方は尋常ではありません。細胞を殺したり、突然変異を起こしたりするのではないのです。ホルモンや他の化学伝達物質がほとんどの部分を担っている、体内の伝達システムを混乱させることにより、異常を引き起こ

すのです。鍵となるコンセプトは、化学伝達物質であつて、性的ダメージでも突然変異でもありません。

科学的証拠の中には、人が汚染物質に接触する時期が、摂取量と同様に重要な意味をもつかもしいないことを示すものもあります。

ホルモンの伝達物質は、発育初期に特に重要な役割を果たすので、これを妨害する化学物質は、子どもや胎児に多大な悪影響を与えます。

ホルモン作用かく乱物質は、伝統的な毒物学の考え方、つまり毒物への生物学的反応は摂取量に比例するに反します。多量の摂取は、実際には少量の摂取よりも小さな影響しか生みださないかもしれません。

ですから、この複雑で魅力的なテーマに取り組むジャーナリストは、こうした化学物質は従来とは異なる法則で働くということを頭に入れておくべきです。普通の毒物でもなければ、発ガン性物質でもないのです。ホルモン作用かく乱物質に関する研究が進む中で、科学者たちは、化学物質が通常の生物学的プロセスを覆し、健康を脅かすという全く違ったメカニズムについて研究しています。

ホルモン作用かく乱物質への懸念を増大させている証拠が、さまざまな分野から集まってきています。野生生物の研究や研究室実験

を通じ、化学物質は、ホルモンを混乱させ、性発達に変化を加え、生殖器に障害を与え、免疫機能を脅かすことによって、野生生物減少の原因となっているという確固たる証拠がでてきています。

全般的には、人類は危険な状況にあるばかりか、すでに影響を受けているということ幅広い証拠が示しています。いわば「バックグラウンド値」の汚染物質でさえ、被害者を出しているということなのです。人体への影響に関しては調査が始まったばかりですが、残留性のあるホルモンかく乱物質の仲間であるPCB、あるいはPCBとダイオキシンの、胎内で高レベルの接触をした子どもには、免疫機能の変化、神経系と動作の遅れや学習障害があることが分かってきました。

地球の生態系と食物組織にも充満

人間はまた、ホルモンかく乱物質に露出した野生生物や実験動物にも見られる多くの健康障害に、徐々に患わされているようです。こうした傾向は、一部の地域で起きている精子数の減少や睾丸ガンの増加、不降下睾丸や尿道の出口がベニスの先ではなく根元近くにあり、尿道下裂に見られる男性の生殖器欠陥

の増加を含んでいます。ヨーロッパを代表する生殖分野の研究者は、これらの男子の問題は、胎内で過度のエストロゲンに露出することに関係があり、一部には、エストロゲンと似たホルモンのように作用する化合物に由来するかもしれないと考えています。

過去十年間の研究が示したのは、少量の汚染が実際には重大な意味をもつかもしいれないということでした。ほんの少量のダイオキシンの摂取の影響力とそのタイミングが作る違いを示した草分け的な研究結果があります。ウイスコンシン大学のこの研究チームは、成熟したオスネズミに化学物質を投与することにより、ダイオキシンの生殖機能への悪影響を研究しました。その結果、ネズミが死にそうなるほど多量に投与した場合のみ、生殖機能にダメージを与えると分かりました。

次に出生前の露出に研究の焦点を移しました。妊娠したメスのネズミに胎児の成長を左右するような時期にほんの少量のダイオキシンを投与したのです。今度はその子供に深刻で一生涯続く障害が見つかりました。精子数の減少や異常な生殖行動など、生殖機能にさまざまな問題が出たのです。成熟したネズミに目に見える悪影響を与える量に比べるとはるかに少ない量を適時に投与するだけでそうだったのです。この少量というのは人が通常に

摂取している量つまりバックグラウンド値に等しいために、この研究は人の健康への悪影響に関する懸念を増大させました。

私たちはホルモン作用かく乱物質と日常生活の中で常に接しています。ゴミ焼却による大気汚染、殺虫剤、工業製品、洗剤、さらに食べ物のプラスチック容器などがそうです。ホルモン作用かく乱物質は、地球の生態系と食物組織の中にも充満しています。

『奪われし未来』の一章で詳しく触れたように、これら汚染物質の多くはじつとじていません。空気や海流に乗って地球上を移動するので、北極の人里はなれた地域や、太平洋の真ん中などの予期しない場所でも蓄積されつつあります。ミッドウェー島のアホウドリに関する最近の研究では、予想に反する高レベルのDDTなどの汚染物質が鳥の体内から検出されました。

こうした合成化学物質は、子どもの受け継ぐ遺産の一部となってきました。残留性のあるDDTやPCBやダイオキシンのような化学物質、これらはホルモンのように作用しますが、女性の体脂肪の中に長年をかけて蓄積します。妊娠期間に女性の身体は、新しい人間を生成するのに必要なエネルギーを供給するため、貯蔵された化学物質は再び血流の中へと戻ります。そうなると、汚染物質は、胎

盤を通して母から発達中の赤ん坊へと伝えられます。誕生後、母親は赤ん坊に母乳をやりながら、さらに多くの汚染物質を受け渡すこととなります。第二次世界大戦後に生まれた人々は、胎内で最初に人工化学物質に触れた経験をもつ人たちです。

第二次世界大戦の終戦時に、いつせいに工業化社会をなめつくした化学革命により、私たちは何十億ポンドという化学物質を地球上にばらまいてきました。アメリカでは現在、七万二千種の合成化合物が市場に出回っています。毎年二五〇〇種の新しい化学物質がそこに加えられ、その中で安全性確認テストの一部だけでも受けているのは、一五種類だけです。今日使用されている化学物質で、胎内で接触する胎児への影響を適切にテストされたものはひとつもありません。

私たち、特に子どもたちは合成化学物質の巨大な地球実験場のモルモットとすべき存在なのです。

質疑 応答

■石井徹（朝日） 最近、環境ホルモンの問題が紙面を賑わすようになって、読者の方から「いつたいたいどうしたらいいのだ」という質

問をよく受けます。今までの毒物でしたら暴露量を減らすなどで、ある程度避ける方法があるのかもしれませんが、「場合によっては多量にとった方がいいこともある」というようなお話ですので、ますます懸念材料が増し、不安感を与えたいと思います。いつたいたいどのように対処したらいいと考えているのかをうかがいます。

まずポップス条約の締結を

■タマノスキ あなたがおっしゃるように、この問いに対するシンブルな答えというのは、ないわけです。私どもが書きました『奪われし未来』で、「わが身を守るために」と題したチャプターがあります。そこで個人的に、あるいはグローバルな形で、どのように自分自身を守っていけばいいか、ということを書いていきます。私たちがたとえば家族の一員として、どうすれば危険を避けることができるかについて、いろいろとレコメンデーションしているところもあります。たとえば化学物質の摂取を避けるために、食事の内容を変えていくということも、指摘しています。

それから、この残留性の高い化学物質というのは、動物性の脂肪を通して摂取されるわ

けでするので、できるかぎり摂取する食物としては、いわゆる食物連鎖と呼んでいる物の中で、下位のレベルのものをとるようにすることも、一つのアイデアでしょう。ですから、脂肪分が高いものには、それだけ化学物質の蓄積があり得るわけですので、とるのをやめる。たとえば、牛肉とかマグロとか、そういった食物連鎖では上位にあるようなものはやめる。

これ以外にも、たとえばプラスチック容器に入った食品を、電子レンジで加熱をして食べることは、しない方がいいと私は思っています。なぜなら、加熱することによって、プラスチックから何らかの物質が、食べ物の方に溶け出してこないとも限らないわけです。たとえば私はプラスチック製のカップに入ったコーヒーなどは飲まないようにしています。

こういうことを言うからといって、このプラスチックは安全で、このプラスチックは安全ではない、という区別を私がつけられるというわけではありません。とにかく、どのような悪い物質が滲み出してこないともかぎらない、ということ、私はこのような予防的な対応をとるようにしたらいいのではないかと、思っています。

しかし、究極的には、個人ができることに

は限りがあるわけで、やはり社会全体として、あるいは地球民族であるという意味での種という観点から言いますと、地球レベルでグローバルに行動しなければいけないということがあると思います。

残留性の高い汚染物質というのは、国境を越えて移動します。たとえば日本で法律を作り、「化学物質を段階的に排除していくのだ」ということを決めたとしても、たとえば中国で、あるいはインドで継続的に使用されるということになると、海洋生物の体内に蓄積され、魚という形を通して日本人に摂取されるということもありましょうし、あるいは大気中を通じて伝わってくるということもあるでしょう。

アメリカでDDTが禁止された、あるいは少なくとも使用が制限されたのは一九七二年でした。しかしながらこのような制限をとっていない地域、たとえば中南米などを經由してDDTはアメリカに入ってきているわけです。ですからこの問題を解決するには、グローバルなレベルで対応しなければならぬのです。

私が話をするときに、皆さんによくお願いするのは、六月ごろにまとまるであろうと言われている、国連環境プログラム(UNEP)がイニシアチブをとっているポップス条

約への協力です。このポップス条約というのは、残留性の高い有機汚染物質を、これから規制しようというものです。

「この条約を各国政府が積極的にサポートするよう、皆さんも働きかけてください」ということを、私はよく申しあげます。残留性の高い有機系の汚染物質というのは、DDT、PCB、ダイオキシン、といったものが入っていますけれども、これらにとかく何らかの規制をかけよう、ということを経路バルにやる第一歩がポップス条約の締結ではないかと思えます。

■竹居照芳(日経) ダマノスキさんの本は、内容が非常に衝撃的だと思うのですが、アメリカ政府とか、あるいは企業とか、こういう本による新しい問題提起を受けて、何らかのアクションを起こしているのでしょうか。

米国は飲料水・農薬法を改正

■ダマノスキ 私どもの本がアメリカで出たのは一九九六年三月でしたけれども、その後一年間に出た、六つぐらいの法案において、私たちが指摘しているような内容について

言及がなされています。

その中で二本の法案は、本の出た年に可決されました。一つは、改正された安全飲料水法です。もう一つは農薬法を改正したものです。食品品質保護法という新しい名前がつけられています。この二本の法律に基づきまして、アメリカの環境保護庁が、「二年以内に、ホルモンに影響を与えるような化学物質を審査するための、テスト方法を確立せよ」という勧告を出しています。

したがって、一九九六年以来、産業界の代表、それから公衆衛生を代弁するような人たち、それ以外にも、この問題に関心を持っているような人たちが集まり、どのようなテスト方法をもつてすれば、審査することができるとのかという議論を、ずっと続けているわけです。

これはまだ続いていまして、ちょうど私が日本に向けて発つところに、その会合の一つが行われて、何らかの結論をえた、と聞いていますけれども、詳しいことはまだわかっていません。どうやら基本的には、産業界の意見と、一般公衆衛生といいますが、人体への影響を考える人たちとの間で、大きな議論の対立があるようです。

つまり、どれぐらいまでの低レベルで化学物質のテストをするのか、ということをめぐ

る議論で、低レベルではやりたくないというのが、業界のスタンスのようです。科学的には、絶対にやるべきだということでも、業界としては、そのような低レベルではしたくない。どのレベル、どの投与量でのテストをするのかというところで完全に膠着状態になっているというのが、私が知っている現状です。

産業界がなぜ反対をしているかと言いますと、いま相当の化学物質がマーケットに出回っているわけでして、そのすべてに関して、低レベルでのテストをやるということになるは大変なコストがかかる。そうではなくて、ごく少数のテストだけですませてしまいたい、というのが背景にあるようです。

かく乱物質への欧州各国の対応

それから、欧州の状況がどうなっているかについてですが、多くの国々において、この問題を科学的に検討するための、専門家委員会を設立しています。オーストリア、ベルギー、フランス、ドイツ、スウェーデン、英国といったところでは、すでにそのような委員会がありますし、ギリシャとイタリアにおいては、設立を検討中です。この問題を科学的

に調査することを、多くの国々で行っているわけです。

それから欧州でいま懸念が高まっているのは、プラスチック製品の可塑性剤として使われている化学化合物が、たとえば赤ちゃん用のおもちゃとか、赤ちゃんの歯がはえてくるときに噛ませるような、おしゃぶりのようなものから滲み出してくるのではないかということです。

すでにそのようなおもちゃを禁止しているのが、イタリア、スペイン、スウェーデン、デンマークです。また欧州委員会においても、とにかく化学化合物が入っているようなおもちゃは危険であるということで、何らかのアクションがとられるという態勢になってきています。

それから個々の国においていろいろな規制がとられています。たとえば、デンマークにおいては、この分野で傑出した、ニールス・スカツケベックという科学者がいるわけですが、彼が、先ほど言いましたプラスチックの中に入っているサイレーツという化合物の禁止で、指導的な役割を果たしています。

洗剤とか農薬に入っている化合物を禁止しているのは、デンマーク、ベルギー、スウェーデン、フィンランドです。これは農薬が植物の表面にびったりくっつくようにするため

に使われている化合物です。ナノフィノール・ポリエポキシレイト、NPEOSという略字でよく知られている名前の化合物です。

英国は今年一月に、業界に対して、工場から外部に放出されるような内分泌系かく乱物質の放出を削減するよう提言しています。放出削減をしながら同時に代替物質を探すようにする。そうすることによって段階的にかく乱物質をなくしていく。有害物質は究極的にはなくしていくべきである、ということ呼びかけています。

もちろん、これはレコメンデーションということであり、法律に基づいて義務づけられているようなものではありません。この動きが英国の政府から出てきたのは、英国の環境庁自身が、いろいろと科学的な検査をしてみただけです。

野生生物の中にホルモンの効果としてどのようなものが出てきているかということ調べてみたところ、イギリスの河川に生息している魚が、極度にメス化しているとか、あるいは性的に混乱しているということが分かった。たとえば下水処理場を通したものが川に流れ込む、あるいはそれ以外の汚染源から汚染物質が流れ込むことによって、影響が出てきているということを確認した結果、レコメンデーションが出ています。

OECDを通じての国際的な取り組みというのがあります。これはテスト方法を世界共通にしていこうということですので、抜本的な対策をとるといっわけではありません。すでに日本の科学者も、この計画に参画しているわけですので、日欧が中心となってやっていこうとしている動きというのは、アメリカで行われていることと、ある意味で同時平行的ではないかと思えます。

どのような学術研究が行われているかというものの、いわばインベントリー・チェックのようなことも行われています。要するに、重複して各国が同じ研究をすることがないように、アメリカもOECDや他の国々に働きかけて、どういう人が、どういうところで、何をやっているか、ということを確認しようとしています。これほどの重要な問題ですので、重複活動はできるだけ避けるほうが効率的な対応につながると思えます。

■伊藤正治（共同OB） ホルモンかく乱物質について示唆に富んだお話をありがとうございます。ございました。私は、身近な問題で医療廃棄物についてうかがいます。日本では、その規制が感染廃棄物という枠で規制があるだけで、非常にズサンで、業者も悪徳業者がはびこって、非常に問題があります。米国では、どの

ような法律で規制が行われていますか。

■ダマノスキ 法律はあるのですが、私はそれについてよく知っているというわけではないのです。法律があるというのは、よく知っていますし、またそれによって病院は、廃棄物を特別な方法で捨てなければならぬ、というようになっていくということも知っています。

いまアメリカで懸念が増えている分野としては、病院による廃棄物の焼却問題です。病院には焼却炉が通常設置されていますし、しかも病院は多量のプラスチックを使用しているということと、この問題に対して社会責任を持った医師団という組織がありまして、名前はちよつと忘れたのですが、「ヘルシー病院」だったか、あるいは「クリーン病院」だったか、何かそんなキャンペーンをやっています。

つまりこのキャンペーンでは、病院というのはそもそも疾病を治癒する場所であるべきであり、プラスチックなどを焼却することによって、近隣地域にダイオキシンを撒き散らして、それがまた別の疾病の原因となるようなことをしてはならない。そういう趣旨のキャンペーンをやっています。

■井田徹治（共同） 化学物質が市場に出回る前の安全性のテストというのは、どうあるべきでしょうか。

ホルモン効果のあるものは禁止に

■ダマノスキ 私は、そういうことについて議論する委員会のメンバーになっているというわけではありませんが、専門的な答えができるとは思いません。もしそういう委員会に私が属していたならば、言うであろうということは、「そのようなテストというのは、必ず分量の非常に少ない低濃度で行われなければならない」ということです。

我々が通常、接触している程度の、低レベルでのテストでなければならぬ、ということとです。たとえば非常に濃度の高いところでテストしておいて、「高レベルではこうだから、低レベルではこうだろう」というふうに直線的に結論づけるということは、ホルモンかく乱物質に関してはできないと思っと思います。低レベルと高レベルでは、全然違った行動をとるのが、かく乱物質ですから、必ず低いレベルでテストしなければ意味がなくなってしまう。

テスト方法に関して私が思っている懸念と

というのは、ある方法を決めたとして、それで九〇%の化学物質は検査できるかもしれないませんが、化学物質は体内でまったく違った働きをするというものもたくさんあるわけです。すべてがホルモン・レセプターを通して活動するわけではない。どのようなテスト方法であつても、何かそこから漏れ出てしまつて、我々がキャッチできないようなものが出てきてしまうのではないか、ということ、私は常に恐れています。

もう一つ、追加的に申しおきますけれども、現在ある委員会、テスト方法をどういうふうにするかを議論していると言いました。現在の草案によりますと、ホルモン効果があるということ、証明するだけでは十分ではない。とにかく悪い効果がある、悪影響が出ているのだ、ということが証明されなければならぬ、というのが基本的な考え方になつていきます。

このようなアブローチというのは、大変問題があると思つています。なぜなら、私としては、ホルモンに作用するということが分かつたような化学物質というのは、すべて商取引、市場からはなくす方向でもつていくのが好ましいと考えるからです。

人間の体とかシステムというのは非常に複雑なものでして、動物実験をたどやつたと

しても、本当に正しいところを見て、しかも正しいタイミングで、「こういう影響があつた」とか「こういう影響がなかった」とか、そういうことが断定的に言えるものだろうか、と私はとても疑問視しているわけです。

たとえば過去の経験から私たちが知つたことは、あることをやつた結果、その影響が出てくるというのは、何十年も後になつてという場合もあるわけです。それを本当に証明するために、動物をそこまで長く生きさせることができるでしょうか。たとえばラットを使った実験をしたとしても、ラットの寿命は人間と同じほど長くないわけです。

ですから、たとえば免疫系、神経系、内分泌系、生殖系と、体の中ではそれらが複雑に絡み合つて、お互いに話をしたり、伝達しながら、体のシステムというのは成り立っているわけです。たとえば生殖系のところだけを見て、悪影響があるかどうかを探していたところ、実は免疫系の方に非常に悪い影響が出ていたかもしれない、とそういうことがあるわけです。

悪影響があるかどうかということを検査するため、いったい動物実験とか、私たちが知つているような実験手法の中で、正しい場所、正しいタイミングでできるのか、というのは、非常に不安でありますし、分からない

と思います。悪影響があるかどうかを見るのではなく、ホルモンに作用するということが分かつたならば、その時点でそのような化学物質というのは市場からしめ出す、というふうにすべきだと思つています。

子どもの発達に非常に重要な影響を及ぼすかもしれない化学的なメツセージ、ケミカル・メツセージというものを、かく乱してしまふかもしれないような、そういう効果を持ち得るような化学物質というのは、人間の住む環境内に一切あつてはいけない、というのが私の個人的な意見です。

(文責・石川)

Dianne Dumanoski 氏略歴

公共放送のプロデューサーやリポーターを経て、七九年にボストン・グローブ紙入社。八三年から九三年までの十年間、環境担当記者として九二年の地球環境サミットなど環境問題を幅広く取材。現在はフリー。九六年三月に二人の科学者と共著で『奪われし未来 (Our Stolen Future)』を発表。

■一九九八年三月二十四日（火）懇談会

長野パラリンピック

バリアフリーへ第一歩

大日方 邦子

日本選手団は金12、銀16、銅13、合計41個のメダルを獲得し、すばらしい成果をあげました。障害をもつ選手たちがどんな思いをこめて戦ったのかを、代表してプレスと同僚でもある大日方選手が語ってくれました。まっすぐで誠実な大日方さんの正直な発言に、出席者は一様に胸が熱くなるのを抑えきれない状態でした。

大会が終わって、今日（三月二十四日）で一週間ちよつと経ったのですが、自分が思っていた以上に、世間の皆さんが今回のパラリンピックに対して注目していただくのだな、ということを感じていきます。

実は、パラリンピックの選手村の各部屋にはテレビがないのです。新聞も交流ゾーンという、いろいろな方が入れる所にしかなかったものですから、自分があのように新聞の一面に載せていただいていたりと、テレビの

ニュースで話題になっていたりとかいうことが、とくに最初のうちはあまりピンとはきていませんでした。

途中から、滑降が終わってから、徐々に新聞の切り抜きをいただいたりとか、皆さんがいろいろ取材に来てくださいました。それで「ああ、すごいことになっているらしい」ということを、ようやく実感し始めたのです。すべて終わって帰って来てみて、いまだにいろいろな方々から声をかけていただくので、あらためて「すごいな」と思っています。

パラリンピックが終わりだったので、自分の中ではある意味では一つの区切りにはなっています。しかし、今回、本当に大勢の方から祝電をいただいたり、お電話をいただいたりしたので、まだ実は何もお返事ができていません。家の中もまだかたづけず、バタバタしています。仕事の方も本格的に、なるだけ早い時期に復帰して、お世話になった皆さんへのごあいさつなどもちゃんとしなければいけないな、と思っているところです。

今回の大会で日本選手団は多くのメダルを獲得しましたけれども、かげでサポートしてくださった方々の力が非常に大きかったと思います。私はアルペンスキーですので、ほかの競技についてはよく分からないのですが、自分の出場した競技に関して言えば、やはり三年前から厚生省が主体で、国の事業という形で強化チームを作り、合宿を重ねてきたことも大きかったと思います。それとチェアスキーですので、メカニックの進歩というか、そういう方々の昼夜を問わない開発努力のおかげでもあります。

そしてもう一つ、忘れてはいけないのはサポートの方たちです。私たち障害をもつ者がスキーをするには、どうしても他の人たちの人手が、オリンピック選手に比べてかかるのは事実なのです。サポートと呼ばれる人

たちが、選手と一体になって、コーチ、トレーナーとともに努力してくださったおかげで初めて取れたメダルだと思っています。そういった方々への感謝を、私は忘れたくないと思っています。

全く知らなかったクラス分け変更

すばらしい大会だったのですが、それでも私なりに感じた問題点もありました。たとえばクラス分けの問題です。クラス分けという、障害によってクラスを分ける方法がパラリンピック特有のものとしてあるのです。チアスキーというのは、三つのクラスに分かれています。障害の重い順にLW10、1、2となっていたのですが、私は1、2なので、そこをさらに2つに分ける、ということが急に試行的に行われました。

つくづく私たちのこれはスポーツとしてはまだまだで、これからもっと組織もしっかりしていかなければいけないし、ルールも手順を踏んで決めていかなければいけない、というようなことを感じました。

何人かの記者の方に「いつの段階でクラス分けについて知りましたか」と質問されましたが、私は実は、まったくクラス1、2を二と二という形で分けるということを知っていた

かった。日本チームとしても、これは全く知らない問題でした。IPCという立派な国際組織があるので、今後は日本からも代表する組織と人をぜひ送り込み、そうした活動に積極的に参加していつてもらいたいと思います。

四年後にはソルトレークがあります。私たち障害者のスポーツというのは、今回ようやく競技として認められるようになり、ようやくスタート地点に立ったばかりだと、私は思っています。ですので、まだ足元が固まっていない部分も多いのですが、四年後、八年後とパラリンピックの発展に向けて、私なりに努力していきたいと思っています。皆さまにもぜひ福祉問題ということではなく、競技としてパラリンピックを見るという視点で、今後もうご支援いただければと思っています。ありがとうございます。

質疑応答

■伊波新之助会員（朝日OB） おめでとうございます。競技としてのチアスキーをみて、実に感激し、また感心いたしました。障害者として仕事をしながら、スポーツも一生懸命やって、とても立派なことだと思えます。ところで、普段の生活はどういうふうな

ことでしょう。どんなふうに時間の配分とかをしているのか。どういう苦労があるのか。障害者のスポーツマンとしてどういうことが大変なのか、というようなことを教えていただければと思います。

障害者にもスポーツの楽しみを

■大日方 仕事とスキーとの両立ということかと思うのですが、やはり仕事あつてのスキーだと私は思っています。もちろん私たちはプロではありませんので、スキーをするために稼がなければいけないわけです。ある意味ではそういう意味でも仕事をしているわけです。仕事はとも大切なものだと自分では考えています。またいま自分がやっている仕事にはとても興味もありますし、ますます磨いていきたいものだと思っています。

そう言いますが、スキーをやっているわけですので、なかなか時間をとるのは確かに大変です。大変ですけれども、例えば早朝に朝、仕事を前倒しにして行うことによって、早く帰ってトレーニングをします。夜、結構遅くなってからだと、道路もすいていまずし、そういう時間の方が練習の場所に行きやすいのです。車椅子で走ったりもしていたのですが、そういうのは人がいなくなつてか

らの方がやりやすい。そういう形で自分なりに工夫してきたつもりです。

それとやはり職場の方の理解が非常に大きかった。本来は非常に時間が不規則な職場での仕事なんですけれども、早めにあがって練習に行かせてもらったりとか、いろんな形で応援していただきました。

障害者のスポーツで一番大きな障害になつてしまうのが、練習場所の確保だと思います。私はアルペンですが、アイススレッジなんかに関していえば、スケートリンクを傷つけるということ、なかなか練習場所を貸していただけないと聞いています。アルペンスキーに関して、やはり最初は、「リフトに乗れないのではないか」とか「ほかのお客さんと接触したら困るから」と言われることもありました。長野パラリンピックへ向けての強化事業が始まる前ぐらいまでは、スキー場の中には「チエアスキーお断り」というところもありました。

いまではほとんどのところで快く使わせていただけるのですが、アルペンですので、どうしてもボールのセッティングをした練習が必要になります。そうするとやはり、なかなかボールパンを貸してくれるスキー場というのは多くはないのです。そのへんが、アルペンとしてはしんどいところでした。

冬の競技だけでなく、全般的にいえることはやはりトレーニングをする場所の問題です。筋力トレーニングをするとか、泳いだり、車椅子で走ったりとかということをするためのスポーツ施設はあっても、まだ車椅子では入れないところが多いのです。例えばロッカーに行くにも、プールに行くにも階段があるんですね。そういう施設がまだまだ多いのです。

一般的には障害をもつてもスポーツはできるわけですし、それは普通のことなんです。ぜひ新しく施設をつくるとき、あるいは改築する際には、車椅子でも対応できるとか、視覚に障害をもつても使えるようなものにしていただければいいな、と思つていきます。

■村野賢哉会員（NHKOB） 昔あなたと同じ仕事をしていたことがあります。障害者スポーツというのはスポーツでありながら、厚生省の管轄だそうですね。普通のスポーツは文部省の外局の管轄ですね。そのためにIPCの方でも、普通のオリンピックと一緒にやってくれ、という希望がなかなか受け入れられない。

私もテレビで拝見していて、たとえば国民体育大会の一部門に、どうして障害者スポー

ツが入らないのかとしみじみ感じました。これからそういうチャンスがくると思いますが。また、そういう運動をなさったらどうでしょうか。もちろんジャーナリズムもやるべきだと思つたのですが、もし、一般のスポーツと一緒にやるとしたら、どういう設備と、どういった方が必要なのかということも教えていただきたい。

オリンピック選手とも交流したい

■大日方 厚生省管轄、文部省管轄というのは、私もかねてから気になっていて、理想というか、将来的には、障害者のスポーツも健常者のスポーツも一緒にできるものだと信じています。そうなってくれることを望んでいます。その際に必要になってくるのは、とにかくまず一緒に練習するなり……。今のところ全くと言っていいほど交流がないので、交流していくことからまずスタートするのではないかと思います。

設備面に関しては、先ほども申しあげたように階段があつて使えないとか、そういうことはあります。しかし、障害者を受け入れることが、それで大変だとかということでは本来的にはないと思うのです。どの方も今日、健常者でも、明日は障害者になる可能性はあ

るわけです。ですからぜひそのへんのところを特殊なことだと思わずに、北欧のいわゆる福祉先進国がやっているように、普通に初めからそういうことを考えて、ハードもソフトも含めて作ってあげれば、おのずと施設面の問題は解決します。そうすれば一緒にになったときに何の問題もなくスムーズに移行できると思います。

厚生省か文部省というのは、一選手として私が何かを言えるような立場ではありませんけれども、やはりあまりにもいまのところ対応に差があるのは事実だと思います。今回は「長野があるから」ということで、私たちの強化事業を行っていただきました。四年後に向けてどういう形で行っていただけるのか。あるいは全く行っていただけなのか。実は私もとても不安に思っているところです。たぶん皆さんもご存じだと思いますが、「長野までだ」と発言していらつしやる方もいます。しかし、今回こういう形で日本選手団として成果をあげることができましたので、これを機会に態勢が変わっていくといいな、と思っています。

■司会（和田千年会報委員） ちよつと関連するのですが、つい先日の新聞の投書欄に、あるお年寄りの投書がありました。「理想と

しては身障者も健常者も一緒にやりたい」ということをおっしゃいましたが、投書の内容は「オリンピックと、開催期間を分けなくて、一緒にやったらどうか」というものでした。これはいいなと思つて、いつの日か分かりませんが、そういうことにマスコミに携わる一人としてできることなら協力したいと感じました。ちよつと思ひ出したので付言させていただきます。

■中井盛久会員（NHKOB） 三歳のときに交通事故にあつて、そして高校でスキーを始めたと聞いております。スキーにまず絞り込んでやろうというところで、何かきっかけがあつたのかなと思います。そのへんのところの少し詳しい話をしていただけませんか。

スポーツは自分を高めてくれる

■大日方 スキーを始める前は、私は小学校のときから水泳をやっていました。やっていたといつても、それは別にパラリンピックを目指そうというようなことではなかったのですが、スポーツが好きでやっていたのです。水泳は義足をはずせば、水の中では障害が障害にならないスポーツなのです。高校生のこ

ろまでは、たとえば車椅子バスケットがあるとか、車椅子テニスがあるとか、そういうことを知りませんでした。

もちろん学校の授業とかでは、義足をつけてバスケットやバレーボールも一緒にやっていました。テニスもやりました。でも、動きに制約がありますので、とても楽しめるころまではいかなかったのです。でも、唯一水泳だけは、自分が生き生き伸び伸びと、そういう意味でスポーツとしての技を追求していくし、どんどん自分を高めていけるものだと考えていたのです。でも、単に水泳だけでは、ちよつと自分の中で満足できないものがありました。そして、これは両親の意向でもあつたのですが、「もう一種類ぐらい、ぜひ障害がじゃまにならないスポーツを」ということで探して、夏場水泳ができますので、冬にできるスポーツは何かということでスキーかスケートを、と。

中学生ぐらいのとき、いわゆる片足で滑るスキーがあるということを知りました。「ぜひやってみよう」ということでドクターと相談したのですが、「無理だよ」とはつきり言われてしまいました。というのは、私の場合は片足義足で、もう片足にもかなりの重い障害がありますので。「立って歩くことはできません、とてもスキーは無理ですよ」と言われ

て、一度はあきらめたのです。半ばあきらめている中で、高校のときに義足を直しに行ったりリハビリテーションセンターで、「座って滑るタイプのスキーがあるよ」ということで教えていただいたのが、チエアスキーとの出会いのきっかけでした。

翌年に講習会に参加しました。生まれて初めて積もっている雪の上に立ったのです。それで、そのスピード感とかバランスをとることのおもしろさ、そういったものにすっかり夢中になってしまいました。

しかし、その段階では、いわゆるレクリエーションとしてのスキーのつもりでしたのです。ところが、大学に入る年に、私の滑りを見ていたチエアスキー協会の強化部のコーチから「トレーニングを積めばパラリンピックの出場も夢じゃないから、やってみないか」と言われたのです。それで本当に軽い気持ちで、「一日でもスキーに多く乗れるならいいや」と（笑い）。

そんなのがきっかけで、アルペンの競技に入りました。入ってからは、すっかりのめり込んでいってしまいました。

■山谷えり子（産経） 今回は長野パラリンピックということで、行政だけでなくスポンサーもかなりついてなんとかできたわけですが、これが次の四年後にお金の面で、どういうふうが続いていくのかという心配な点があるわけです。選手村などで外国の選手なんかと交流してみても、お金の集め方とか組織作りの点で、展望みたいなのがつかめたかどうか。それを教えていただきたい。

それから、私の母は障害者なのですが、障害者になってから水泳を始めました。それで、ハワイなんかに行きますと、海の中まで入れる車椅子がビーチにちゃんと置いてあるわけですね。日本の場合は、まだまだそんな風景を見たことがないのですが、皆さんたちでグループをつくって、そんな提言をするムーブメントをやられたらどうかと思うのですが、どうでしょうか。

米国ではナショナルチームの一員

■大日方 後の質問の方からお話したいと思います。なかなかいまはパラリンピックが終わったばかりで、選手相互の連絡も十分にとれていません。おそらく各地で、それなりに皆さんお忙しくされていると思いますし、たぶん仕事への復帰も大変なんだろうと思います。なかなか連絡はつかないのですが、そういう動きは一部の選手の中にはあります。私たちは今まで一生懸命に「パラリンピックは

競技です。リハビリスポーツではありませんせん」と、強く機会があるたびにお話してきたつもりです。

ですが、もちろんリハビリのためのスポーツとか、いわゆる社会復帰のために必要なスポーツというのもあるわけです。さらにいまお話がありましたように、途中で障害をもたれて、そこからスポーツを始める方、あるいは普通に単純にスポーツを楽しみたい人もいます。そういう人も、普通、皆さんがプールへ行ったり、テニスコートへ通えるように、泳ぎに行ったりテニスをしたりできるような環境ができればすばらしいと思います。いまのところ、具体的な動きとしてどうこうというようにはまだなっていないので、逆にぜひ皆さまのお力添えをいただければと思います。

最初のお金の質問です。私はアメリカの選手と交流することが、今回多かったのですが、彼女たちは職業選手なのです。それに就いてと言われれば、「本当にうらやましいです」という一言になってしまっているのですが、でも、あの人たちもそんなに完全に満足できる練習環境にあるわけではないのです。ライバルと言われましたが、サラ選手とよく話をしたのですが、アメリカにおいてもスポンサー探しは大変のようです。エージェントをつくつ

て、自分でスポンサー探しに回っている選手もいることはいらっしゃるのですが、やはり生活は大変だと言っていました。

今回、長野パラリンピックに皆さんがこれだけ注目してくださったので、彼女たちは「日本はすごく身体障害者のスポーツに理解があると感じた」と言っていました。が、正直なところ「これは長野だからで、長野で行われた大会だから、これだけ注目してくれたので、いままでは全く皆無だったのよ」と彼女たちに話したら、とてもびっくりしていました。「ハートフルで、こんなにいい国はない。設備も抜群だし」というのです。もちろん、長野オリンピックのための設備だったのですけれども。

それでも、彼女たちは「アメリカチームにも、こういう注目のされ方がされるようになることを、ソルトレークでは望みたい」という話をしていました。

彼女たちと交流してみても、ここが一番違うとあらためて思ったのは次の点でした。彼女たちは一応USAのスキーチーム、ナショナルチームの一員なのです。「待遇に差がある」ということをしきりに言っていました。が、それでもスタートの段階が、すでに障害者も健常者も同じ一つのスキーチームの中にあるのです。日本は全く違うところで動いて

いるわけです。なので、おのずと資金面の問題などでもかけ離れてしまうのです。

そういった中で今後につなげていくとすれば、やはり、ぜひスポンサーを探せる態勢をつくる必要があります。これはチームスポンサーというものと、あとはプライベートに各個人が「売れる」という言い方をしますけれども、スポンサーの方に提供していいものも明確に基準をつくって、その上で活動していく必要があるのではないのでしょうか。そのための基盤づくりからまず始めていかないとはいけません。息の長い仕事になると思います。国におんぶにだっこというわけにはいきませんので。そのへんを今後につなげて行きたいと思いました。

■内藤茂会員（NHKOB） 実は私は、長野の健常者のオリンピックよりもパラリンピックに感動したのです。いまの日本人は、あまりにも恵まれ過ぎているというか、これだけの大不況とか、信用収縮とか、明治維新以来の大変な混乱期と言いなながらも、何かふぬけているというか、骨がないというか、自身を見失っている。そういう中で、身障者の方が日本人のもっている大切なものを表現している、という感じをもちました。あなた方が、あれだけの技術とエネルギーを、どう

やって養い蓄積して——（思わず胸をつまらせ中断）。失礼しました、その力の元は何であつたかをうかがいたい。

力の根源は自己表現の喜びから

■大日方 オリンピックよりも感動した、とおっしゃっていたら、とても光栄だと思つていきます。どこからなのか、自分でも分からない部分はあるのですが、ただ言えることは、やはり、社会の中で障害をもって生きるというのは楽だといえ、もちろんウソになつてしまふわけです。

それぞれに、それなりにみんな、どの人も、障害をもっているがゆえに、くやしい思いをしたり苦勞をしたりということは、多かれ少なかれあると思うのです。でも、そういう経験に立った上で、自分を表現することができる、自分を高めていくことができるものとして、それぞれがスポーツに出合った人だと思えます。それで、くやしい思いをしたくない、負けたくないというような気持ちを、各選手が自分なりにもつていたので、競技にそれを思いきつてぶつけていけたのではないかと思います。

あとは、変な言い方ですが、あまり好きではない言い方になるのですが、一度は挫折し

たというふうに言ってもいいと思うのです。そういう中から残された機能を生かして、自分を最大限に表現し高めていく、そしてスポーツが好きだった、そういう中で磨かれてきたものだと思います。一言でいえばその競技が好きだったから、としか言えないと思うのです。

■山谷 座右の言葉とか、家族の励ましとかについても少し話していただかせませんか。

■大日方 特に座右の言葉というものはもってはいないのですが、オリンピックが終わったあとに一つとても感動したのは、スケートの清水選手の話でした。「我以外皆我が師」という言葉に、大変私は感動するとともに、ぜひ見習いたいと思ったのです。「この大会で得たものは何ですか」と聞かれたときには、「努力することと感謝の気持ちです」とお答えしています。

いままで、うちの家族というのは、私が成長するに当たって、全面的にバックアップしてきてくれています。いままもしてくれています。たとえばパラリンピックで、このように皆さんに注目していただいて、母が口をすっぱくして私にいま言っていることは「稔るほど頭を垂れる稲穂かな」という、その気持ちを絶

対に忘れてはいけない」というようなことで。今後のことについても、自分が競技者としてやりたいという気持ちは大切だけれども、周囲の状況もあるし、あまりに感謝する気持ちを忘れて一人で突っ走ってしまっただけいけない、というような話を、家族の中ではよくしています。

■司会 こちらに来る直前に、ゲストルームで、彼女に署名をお願いしました。そこにも「努力と感謝」という言葉を書いてくださいました。この「努力」は彼女自身へ向けた言葉ですが、「感謝」というのは、周りの人すべてへの感謝、彼女をこれまで支えてくれた職場の人もちろんそうですが、トレーナー、コーチ、サポーターもそうでしょう。そういういろんな方への感謝というのを、彼女はひしひしと感じているようです。それからちよつとメダルをべん見せていただけませんか。なんか、NHKの海老沢会長も、「こんなに重いものか」とおっしゃったそうなので、私にもちよつと。

母は「ケガをしないように」と

■大日方 決して集めるつもりはなかったのですが、終わってみれば金、銀、銅とそろつ

ていました（笑い）。

■司会 すばらしい。お母さんは最初に何とおっしゃいましたか。「金」を取ったとき。

■大日方 たぶん月並みだったと思うのですが「頑張ったわね」とか。最初に金をとってしまいましたので、「あとはケガをしないように」とか（笑い）。

■司会 実は私もスキーが苦手で、健常者でありながらスキーができない男の一人なのですが、アルペンというのは斜面が二、三〇度あるんでしょう。怖いと思ったことはないですか。

■大日方 あります。

■司会 やめようとは思わなかった。

■大日方 それは思わないです。怖いのですが、スリルがあつておもしろい（笑い）。

■村野会員 非常時や災害時用の言葉が、知的障害を持った人たちには全然通じていないということ。最近、エッセイで書いたことがあります。鉄道が「運転を見合わせる」と

言ったたら、そういう人たちの中はかなり字も読める子たちが「電車と電車がお見合いをする」というふうに理解していたとか。これは、つまり鉄道屋がそういうバリアをつくらせているのです。それから「非常口」という看板を見ると、「出てはいけないしるし」だと理解している人がいるとか。つまり我々が日常的にならざるに用いている言葉なり、標識なり、設備なりが、そういう人たちにバリアをつくっているのです。

そういうバリアをなくするという運動がデシマークから始まって、いま世界中に広がっているわけですけども、今度のパラリンピックに出て、大日方さんからみてどんなバリアを感じたのか。今度のパラリンピックでいづらかバリアフリーになったかどうか、感想をお話してください。

日本人はつい健常者という言葉を使いますが、私は健常者という言葉は大嫌いです。たまたまこういう姿でいるだけで、ちっとも健常でも何でもない人間なのでですけども。そういう、つまり最初から言葉自体が健常者と障害者に分けてしまう状況があるわけですね。それから知的障害者というのみんな使いたくない、だけれどもいい言葉がないとか、そういうことでジャーナリズムに関わるものとして多少気にしているのですが、この

へんのことについての率直な意見もお聞きしたい。

どうも障害者の方々は、障害者だけで暮らした方が幸せになるのではないかという、つまりコロニー意識が我々日本人には強いようです。そんなふうにしてついで別の世界に住み分けてしまうものですから、街でかたわらに車椅子の方がおいでになっても、どういふうにサポートしていいかが全然分からないというか、気持ちのよどみみたいのを感じざるを得ない。

今度のパラリンピックによって、我々の非常に身近に、いわゆるハンディキャップの方たちが住んでおり、我々と同じようにスポーツをやっているのだ、ということが多くの人々にとっても実感できたのではないかと思えます。さつき国体の話をしましたけれども、もつとこの流れを表に出して推進していくべきではないかと考えています。何かそういう点で、バリアフリーという言葉について、日ごろお感じにならなっていることがありましたら、現在、NHKで教育番組の仕事をしていますので、教育番組の一環としてもお話しさせていただければありがたい。

コトバよりは心を問題にしたい

■大日方 私も障害者、健常者という言葉は大嫌いなのですけれども、じゃあ私たちのことをどういふふうに区別して自分でも伝えていいか、適当な言葉がないのです。うちのチームの中でもよく話になるのです。「障害者」と言われるのはイヤだよとか。「車椅子の人」とかいろいろ言い方があるのですが、いい言い方ではない。それは確かなのですが、やはり、区別して話さなければいけないときはもちろんあると思います。

ただ問題になるのは、その言ったときの言葉の、その人のその言葉のとらえ方だと思えます。非常に抽象的な言い方になってしまうのですが、この大会でバリアフリーへの影響があったとすれば、心のバリアの垣根が少し低くなったかな、とそんなふうには思いません。

もちろん施設、設備面でも残るものというのはあるべきなのですけれども、長野という限定された地域でやっていますので、じゃあ例えば東京はどうかとなると……

私の場合は車椅子で動く方が楽です。楽ですし、もし設備面のバリアがなければ、車椅子で動いた方が何倍も動けるし、動きやすく

なるし、有効なのです。自分の職場である局内はほとんど車椅子でどこへも問題なく行けますが、一歩外に出てしまえば、レストランに入ろうと思ったら階段、買い物しようと思っても階段、町を歩けば人がいっぱいいるのはしようがないのですが、放置自転車もあるし、なかなか難しいのが現状です。それだったら、私であれば歩いてしまった方が速いし、結局は楽に行けることになってしまふ。ですから、完全に車椅子でしか動けない人はやはり家にとじこもってしまう。

こういうハードの面が、少しずつ改良されるには、まず人の心のバリアがなくなることから——。何回も申しあげてしましますが、意識が変われば建物をつくるときにも、スロープをつくったりエレベーターをつくること

が当然になってくると思うのです。そういう意味で今回の長野のパラリンピックで、障害者も車椅子の人も町の中に出るのだということ、実感していただいたのは本当によかったです。

知的障害という表現は私もあまり好きではないですが、IDクラスと呼ばれた彼らも、本当に立派なアスリートでした。私も彼らの動きを見て感動しました。その人たちも、別に何もコロンニーをつくる必要はもろくないわけですし、社会の中でも一緒に働ける仲間

だと思っています。一緒に生活していくと一つ一つが自分たちにとっても得るものがある、といったら変ですけども、そんなことも発見できるのではないのでしょうか。そういうあたりまえがあたりまえになればいいと思います。

健常者と言ったって、私たちもよく言うのですけれども、「義足をつけたり車椅子に乗ったりというのは、メガネをかけることと一緒になんだよね」と。たぶん昔、メガネが出始めたころは、やはり、それも随分変わったものだったこと、排除された人も中にはいたと思います。でも、いまそれがあたりまえになっているように、後々、車椅子の人が町に出てあたりまえのことになると思いますが。

そして必要があれば手を貸してくれる。日本の人たちというのは、助けたくないと思っているのでは決まてないのですが、どう声をかけたらいいのかわからない、という人がほとんどみたいなのです。

欧米ですと、すぐに「ちよつと手助けしましょうか」という一言が出るのですが、日本でもそういう雰囲気は少しずつ生まれるきっかけに、今回のパラリンピックはなったのではないかと、そのように思います。

(文責・岩崎)

大日方 邦子(おびなた・くにこ)さん
一九七二年生まれ、東京都出身、中央大学卒。九六年NHK入局。教養番組(教育セミナー、NHK高校講座)のディレクターを務める。

三歳の時に交通事故で右足を切断、左足にも障害を持つ。高校二年からスキーに取り組み、九六年世界選手権では滑降三位、回転二位に入賞、長野パラリンピックでは滑降、スパー大回転、大回転で金、銀、銅の3つのメダルを獲得した。